

学習者の主体性に着目したI-E-Oモデルと評価指標に関する研究

相原, 総一郎

<https://hdl.handle.net/2324/2236321>

出版情報 : Kyushu University, 2018, 博士 (ライブラリーサイエンス), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

氏 名 : 相原総一郎

論 文 名 : 学習者の主体性に着目した I-E-O モデルと評価指標に関する研究

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

大学の自己点検評価の一環として、教育の改善と質保証が求められている。従来の授業に関する組織への調査だけでなく、学修行動調査として個々の学生に対するアンケートが行われるようになった。しかし、学修行動調査は行動と満足度の把握が目的であり、答えのない時代に求められる主体的に考える力、つまり、学習者の主体性の調査は含まれない。学修行動調査の発祥地である米国における高等教育の一般的説明枠組として代表的なアスティンの I-E-O モデルや、その発展であるテレンジャーニとリーズンによる包括的 I-E-O モデルでも、学習者の主体性は明示されていない。本論文では、I-E-O モデルの入学前情報(Input)、学習環境(Environment)、学習成果(Output)における学習環境を、教職員支援と学友と主体的学生関与の3要素とする構造化モデルを提案し、具体的調査のための評価指標を開発し、我が国の短期大学群の調査に適用し、相互比較や改善点抽出に有用であることを示した。

具体的には、第一に、我が国の調査データを対象として、相関と一因子性の観点で学習者の主体性の主要因子を求めた結果、米国の調査データで得られた4項目と一致していることを確認した。これは、この4項目の指標が普遍的なものであり、国際的な共通の評価枠組みとして利用できることを意味する。第二に、I-E-O モデルの学習成果(Output)における、知識・技能については学習者の主体性が最も重要な要因であることを示した。これは、学生主体性を明示的に持つ提案モデルが従来のモデルより優れている事を意味する。第三に、我が国の短期大学群について調査分析を行い、モデルと指標の有用性を示した。例えばある短期大学のある専攻は、教職員支援、大学満足度、授業満足度、アクティブラーニングが強味だが、学業の怠慢が弱味であり、平均的な評価値の主体的関与の改善により改革の可能性があることを示した。